

Newsletter 14

日本比較文学会中部支部 2015 年 春号

巻頭言

日本比較文学会第 37 回中部大会シンポジウム報告 「アダプテーションをめぐる」

武田美保子（京都女子大学）

これまで、おびただしい数の物語が、詩、小説、戯曲、オペラ、活人画など、さまざまにメディアを越えて語り直され、表象し直されてきました。先行する古典的テキストのこうした移し替えは、アダプテーション（翻案）と呼ばれ、近年では、特に文学テキストの映画化（フィルム・アダプテーション）に際して使われる傾向があり、これをめぐる研究も盛んにおこなわれてきましたが、この言葉を定義しようとする、決して簡単ではないことに気づかされます。なぜなら、その移し替えは決して、元テキストから他のメディアへの一方向的で直線的な移行関係のみを意味するわけではなく、時にその関係性は双方向的と呼ぶ他はないため、こうしたアダプテーションを分析するためには「相互依存的、もしくはスパイラルで多方向的な視座」が必要とされることが分かるからです。

本シンポジウムでは、司会兼パネリストの武田美保子が、批評家たちによるアダプテーションに関する定義を導入し、その困難性にも言及しながら、アダプテーションとは、その伝達がたえず変異にさらされることにより、元テキストに新たな解釈の可能性を付与する契機ともなっているとの基調報告を行いました。

最初のパネリストの岩田和男氏は、フィルム・アダプテーションにおける、「双方向的、相互依存的、もしくはスパイラルで多方向的な視座」を可能にするメディアとして、レヴ・マノヴィッチによるインターフェースという概念を導入しました。そして、すべてのデータが電子化、ハイパー・メディア化されたコンピューター・インターフェー

スというプラットフォームに並列的に置かれる形態をいわば先取りするように、映画的に小説に接近した作家たちをアダプテーションの実例として取り上げました。扱われたのはジェイン・オースティンの『高慢と偏見』で、この小説における視線の交差がいかに映画の作法を先取りしているかを分析し、そのことから、逆説的に、視線に関する映画の文法がいかに写真的であるかを明らかにしようとした。運動の位相での先取りの興味深い例として H・G・ウェルズの『タイム・マシーン』が取り上げられましたが、時間の関係で示唆されるにとどまりました。

第二のパネリストの武田は、フィルム・アダプテーション分析の際に多方向的な視座が必要であることを例証するため、まず分かりやすいサンプルとして、多数のアダプテーション映画が撮られているメアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』を取り上げました。そして、元テキストの書き換え小説アラスター・グレイの『衰れなるものたち』が、いかに『フランケンシュタインの花嫁』などの映画版のアダプテーションとなっているかを分析しました。さらに、その検証を基に、「赤ずきん物語」の書き換えであるアンジェラ・カーターの狼 3 部作と呼ばれる短編小説と、そのフィルム・アダプテーションであるニール・ジョーダンの『狼の血族』を、視点の問題や二重のエンディングなどに注目しながら取り上げ、そこで扱われている身体の境界性の問題についても論じました。

第三番目のパネリスト平林美都子氏は、ディヴィッド・ミッチェルの二作品を扱いました。まず、映画化された彼の第三作『クラウド・アトラス』を、フィルム・アダプテーションの典型的な例として取り上げ、諸々の映画の工夫によって、時空を超えた物語がいかに観客にとって違和感なく理解可能なものとして提示されているかを分析しました。続いて、ジョン・レノンの歌のタイトルを小説のタイトルとし、さまざまなメディアのサブストーリーとメインストーリーとが交互に織りなされたミッチェルの第二作『ナンバー9ドリーム』を取り上げ、日本の小説を英語に翻訳したかと錯覚してしまうようなこの小説を、アダプテーションについてのアダプテーション、つまり「メタ・アダプテーション」とする示唆に富んだ提示をしました。

最後に、フロアーからの質問を受け、ディスカッションが展開されました。最も質問が集中し問題化されたのは、「アダプテーション」の定義についてで、メディアの移し替えによるアダプテーションをどの程度限定するかについては、今後いろいろと考えなくてはならないことがあると思いますが、この概念で考え直すことが、「新しい文学観」を打ち立てる契機となりうるのではないかという可能性や希望を感じた次第です。

日本比較文学会 第38回中部大会のご案内

日時：2015年 5月9日（土）

場所：名古屋大学文系総合館カンファレンスホール

〒464-8601 名古屋市千種区不老町 地下鉄名城線「名古屋大学」駅下車
名古屋大学HP 東山キャンパスマップ B4④の建物です。

<http://www.nagoya-u.ac.jp/access-map/index.html>

11:30-12:50 幹事会（文系総合館7階オープンホール）

大会進行：

13:00 開会の辞 愛知県立大学 松本 三枝子

13:10-13:50 研究発表（発表30分、質疑応答10分）

『傾城の恋』と『にがりえ』の語りにおける演劇的要素の対照分析
——視点構造に関する理論を使って

発表：名古屋大学（院） 陸 洋

司会：愛知県立大学 工藤 貴正

14:10-17:20 シンポジウム

「音とコラボレートする」

司会・総括：愛知学院大学 岩田 和男

パネリスト：名古屋大学・院 楊 金娣

パネリスト：九州大学・院 大場 健司

パネリスト：相山女学園大学 長澤 唯史

17:20 閉会の辞：岐阜大学 林 正子

17:20 総会（会計監査報告） 名古屋大学 星野 幸代

18:00 懇親会 司会：名古屋市立大学 小林 かおり
（グランピアット山手通店：名古屋市昭和区 1-24 052-834-8973）

【日本比較文学会会員以外の方々のご来場も歓迎いたします。】

第38回中部大会 研究発表要旨

「傾城の恋」と『にぎりえ』の語りにおける演劇的要素の対照分析
——視点構造に関する理論を使って」

陸洋 （名古屋大学・院）

『傾城の恋』と『にぎりえ』は各々張愛玲と一葉の代表作であり、内容と構造の両方に演劇的な要素が著しく現れている。本発表は、大衆演劇からの受容というアプローチで、これら二つの小説に焦点を当てて、小説テキストに演劇的要素が混じることによってどのような効果を上げうるかを検討する。具体的には二作品の語りの側面に注目し、『傾城の恋』の広間のシーンにおける白氏兄妹のそれぞれの発言と、『にぎりえ』よりカステラをめぐる源七一家の口論を選び、人物による様々な言説の現れ方を物語の文脈・歴史的背景のもとにおいて分析する。方法としては、演劇研究者 Manfred Pfister の視点構造というモデルを使い、『傾城の恋』と『にぎりえ』において一定の条件の下での視点をもつ人物の言説がどのように不整合に絡み合っているか、その衝突の意味を考察する。さらに脱ジャンルの試みとして、演劇研究の理論を小説テキストの分析に使う可能性を示したい。

シンポジウム 「音とコラボレートする」

前回シンポジウムのテーマ「アダプテーション」に触発されて、今回は音のアダプテーションを考える。「アダプトする」ということが、「新しく使うのに合わせて何かを変容させる (to alter or modify so as to fit for a new use)」（OED）ことであるのなら、音とは、それだけでは雑音と何ら変わるところがないのに、まさに、言葉／リズム／映像という新たな契機と絡む（コラボレートする）ことで、ある美学的価値が加わる面白いメディアであることに着目したい。

筆者の個人的な発想の端緒は、トーキー映画の出現、すなわち無声映画に音が付加されたことの意味についての考察、具体的には、映画に音が加わったことと「アウラ」の関連である。本シンポジウムはそこから出発して、マ

クルーハンが言うように「メディアはメッセージである」のなら、音というメディアが付加することの文学／美学／社会／政治的意味は何なのか、さまざまな報告をもとに考察を深めたいと思う。

岩田は、出発点を少しだけ述べて、以下の若手・ベテランの報告を総括するコーディネーター役に徹し、ディスカッションの時間を確保する予定である。

(発表順)

——音と映画

『悲情城市』におけるサウンド・スタディーズ

楊金娣（名古屋大学・院 博士後期）

「Sound Studies」の視点、具体的には、映画の中に聞こえる音（聞こえないサイレンスも含む）から掘り出される様々な情報に着目して、侯孝賢『悲情城市』を再考する。登場人物がいつ何をどう話すか、特定の場面にどんな人が登場するか、ノイズとサイレンスがどう使われるかなどなどを分析し、その背後に隠されている情報を解明したい。

このような視点をきっかけに、＜登場人物がいつ何をどう話すか、特定の場面にどんな人が登場するか＞から脱コロニアル批評、＜特定の場面にどんな人が登場するか、ノイズとサイレンスがどう使われるか＞から女性／ジェンダー批評に辿り着けると考えるが、その際、映画音声分析において「最も鋭い目」と言われているフランスのミシェル・シオンの理論を参考にする。

——音楽と文学

「ロックを聴く安部公房

—ビートルズ、プログレッシブ・ロック、シンセサイザー—

大場健司（九州大学・院 地球社会統合科学府博士後期）

アヴァンギャルド作家安部公房（1924—1993）の文学（小説・エッセイ・戯曲）には、ビートルズ（The Beatles）に始まり、ピンク・フロイド（Pink Floyd）に至るロック音楽の受容がある。たとえば、安部のエッセイ「ミリタリィ・ロック」（『中央公論』一九六八年八月号）では、ビートルズのプログレッシブ・ロックの先駆だとされているアルバム『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ』

ブ・バンド』(Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band, 1967)が「パロディ」とおして「軍服」のイデオロギー性を無化していることが分析されている。ここで重要なのは、オーソン・ウェルズ(George Orson Welles, 1915-1985)によるウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)の戯曲のアダプテーションを、更に安部がアダプトし、ジャン＝ポール・サルトル(Jean-Paul Sartre, 1905-1980)を媒介にして差異を含んで反復させていることである。

また、ピンク・フロイドに代表されるプログレッシブ・ロックでシンセサイザーが使われていたように、安部公房もまたシンセサイザーを用いて自分の戯曲の作曲を行っていた。安部にとって、文学と音楽の特性がどのようなものであったのかについて、安部のエッセイや対談での言葉を参考にして、考えていく。そして、安部が音楽性をどのように小説に導入してきたかも論じたい。具体的には、ピンク・フロイドの名が直接言及される『カンガルー・ノート』(新潮社、1991年11月)を精読することで、安部の文学と音楽の関係性を論じたい。

——音とことば

「音が“意味”を作り出す——ユーミンによる恋愛の脱構築」

長澤唯史(相山女学園大学)

荒井由実／松任谷由実はその 40 年を超えるキャリアを通じて、つねに「恋愛」の風景を歌で紡ぎ出してきた。だが、その風景はことばと音のコラボレーションによって作り出されてきたことは、これまで十分に論じられているとはいいがたい。本発表では、「ルージュの伝言」(1975)から「真夏の夜の夢」(1993)までの代表的な楽曲をいくつか採り上げ、アレンジやサウンドプロダクションに着目しながら音自体が「意味」を作り出す仕組みを考察し、最終的にユーミンが「恋愛」ソングの根拠を脱構築するプロセスを明らかにする。さらに、なぜ酒井順子『ユーミンの罪』(2013)がバブル崩壊で記述を終えているのか、40 周年記念ベストアルバム『日本の恋と、ユーミンと』(2012)の収録曲の大半が 90 年代前半までに集中しているのかといった問題を、日本での洋楽受容の歴史や 90 年代の J-POP ブームと併せて考察したい。

複眼的思考の勧め

松本 三枝子

平成 27 年 4 月から、中部支部長をお引き受けすることになりました。支部会員の皆様に、ご挨拶かたがた、比較文学の使命と魅力について、一言述べさせていただきます。globalization の波が私たちの日常に影響を与えるようになって久しいですが、その結果、世界が小さくなったと感じる一方で、我々相互の意識はむしろ阻害されたり、隔絶したりしているのではないかと感じることも少なくありません。例えば、今年 3 月にチュニジアで起きた博物館襲撃事件で日本人を含む 21 名が死亡しました。日本人がアフリカの国々にまで、観光旅行に気軽に出かけることができるのは、世界が小さくなり、西欧のみならず、広く他国の文化や社会に直接触れることができるようになった恩恵に違いありません。しかし同時に、globalization により貧富の格差は苛烈なものとなり、政治や社会に対して若者たちが抱える絶望感や閉塞感はテロの温床となり、予想しない場所や方法で、我々を待ち受けています。

我々ができることは何かと自問自答する日々です。比較文学を学ぶものとして、あるいは外国研究を専門にするものとして、わずかなりとも貢献できることがあるとすれば、それは複眼的思考の勧めということになりそうです。比較文学研究では、この複眼的思考が求められますし、単一の discipline では分析できない対象を得意とする研究分野でもあります。

世界のほとんどの場所がネットワークにより情報共有できる昨今ですが、リアリティとしての世界はやはりそれほど小さくも単純でもないということではないでしょうか。そうであるとすれば、グローバル・スタンダードという名の下に単一の基準で、相互理解を深めたり、問題解決を図るのはどうやら困難な時期が来ているということになります。複眼的思考による価値観の多元化や、多焦点化が是非とも必要です。この方法は必ずしも、明快な回答を生み出すことにはならないかもしれませんが、作業過程として、問題共有という肯定的な副作用を生み出すことになります。日々の研究活動はもちろんですが、支部で開催する春と秋の大会、そして院生ワークショップ等が、会員相互の複眼的思考の研鑽の場所になればと願っています。会員の皆様のご協力を是非ともお願いする次第です。

2015 年度の中部支部役員

支部長： 松本三枝子（愛知県立大学）
代表幹事： 福田真人（名古屋大学）
事務局長： 星野幸代（名古屋大学）
編集委員長： 長澤唯史（椙山女学園大学）
会計監査： 田所光男（名古屋大学）
幹事：

岩田和男（愛知学院大学）	長澤唯史（椙山女学園大学）
工藤貴正（愛知県立大学）	林正子（岐阜大学）
小林かおり（名古屋市立大学）	平林美都子（愛知淑徳大学）
小松史生子（金城学院大学）	藤岡伸子（名古屋工業大学）
杉浦清文（中京大学）	星野幸代（名古屋大学）
武田美保子（京都女子大学）	メベッド・シェリフ（龍谷大学）

※支部運営についてのご意見やご提案など、役員の誰にでもお気軽にご連絡下さい。研究発表のお申し込みも随時受け付けております。また、みなさまのご意見・ご連絡等をコンスタントに集約するため、メールでの連絡窓口も設けています。
hikaku-chubu@googlegroups.comをご利用下さい。

事務局からのお願い

■ご異動、お引越しなどに伴う登録情報の変更について：

ご異動、お引越しなどに伴う登録情報の変更がありましたら、速やかに本部事務局 西村靖敬先生 (nishimur@L.chiba-u.ac.jp) までご連絡をお願いいたします。例年、本部より「最新版」名簿が送付されてきますが、中部支部ですでに把握している新しいご住所が反映されていない場合があります、照合や修正に手間取ることが多くなっています。ご面倒ですが、本部へも直接ご連絡下さいますよう、どうぞ宜しくお願いいたします。

日本比較文学会中部支部ニューズレター第 14 号

2015 年 4 月 20 日発行

発行人	松本三枝子
編集担当	長澤唯史
発行	日本比較文学会 中部支部
事務局	〒464-8601 名古屋市千種区不老町 B4-5(700) 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 星野幸代研究室 TEL/FAX:052-789-4875 E-mail: hoshino@lang.nagoya-u.ac.jp